

# 総合的な学習および学校行事から取り組んだ「ペルーについて調べよう」

— 文化祭や修学旅行などを通じたペルーの歴史や文化の学習 —

前リマ日本人学校 教諭

宮崎県宮崎市立生目小学校 教諭 戸 高 元 明

キーワード：ペルーの歴史や文化，総合的な学習，文化祭での舞台発表，学年通信「リマからこんにちは」

## 1. 取り組みのきっかけ

リマ日本人学校のあるペルー共和国の首都リマ市は、16世紀半ばのスペインによる植民地支配でもたらされたコロニアル様式とインカ帝国に代表されるそれまでのペルーにあった独自の歴史や文化が融合された「セントロ（旧市街；世界遺産）」や、「新市街」と呼ばれる現代的なビルが立ち並ぶ街並みが不思議なハーモニーを醸成する人口約800万人の南米五大都市のひとつである。

数年前までは市内でテロも行われ、治安上の問題が日本でも大きく取り上げられたことがあるが、現在ではテロの脅威が国境付近にまで遠ざかり、日本とペルーとの友好も111周年を迎え、FTA（自由貿易協定）の締結をめぐじた日本との経済関係がより深められつつある。

小学部と中学部が併設されている全校生徒数約50名の本校では、全校はもとより在ペルー日本大使館をはじめとする来賓を招いて、毎年11月に各学年での生活科や総合的な学習の時間の中で取り組んできた学習の成果を、約20分間の劇による舞台発表をしたり、展示物や掲示物などによる展示発表をしたりしている。

このことは、初めて赴任した筆者にとって大きな課題となった。ペルーという国のことについてほとんど何も知らない状況であるにもかかわらず、総合的な学習の観点からおよそ半年後には、ペルーのことについて学習した何らかの成果をまとめて大々的に発表しなければならないのである。

学習の取り掛かりとして、まず、子どもたちと共にペルーのことについて、元々は本校が社会科の副読本として作成した「ペルーについて調べよう（Conozcamos el PERU）」を使って大まかな学習をした。ペルーが世界の国々の中でもまれにみる大変異なる三つの地形と気候を持つ国であること、ペルーの歴史が大きく四つに分けられる（インカ帝国前の文化をひとまとめにした‘プレ・インカ期’、ペルーの諸文化をひとまとめに融合させた‘インカ帝国期’、スペイン人の流入と支配が約300年間続く‘植民地支配期’、独立を果たすものの政情的に安定しきれなかった‘独立後’の全四期）こと、ペルーの「防災の日」が5月31日であること、ペルーの代表的な動物や楽器のなどを大まかに学習する中で、子どもたちに概観を持たせることができた。

しかし、日本で言えば東京都に当たる場所に住みながら、博物館や歴史的な建物の見学などにはあまり行っていないこともわかり、遠足を兼ねた校外学習を組む上での大きな参考となった。

## 2. 活動の実際

### (1) 一年目の取り組み（コスタ<海岸砂漠地帯>～シエラ<山岳地帯>の歴史や文化についての研究）

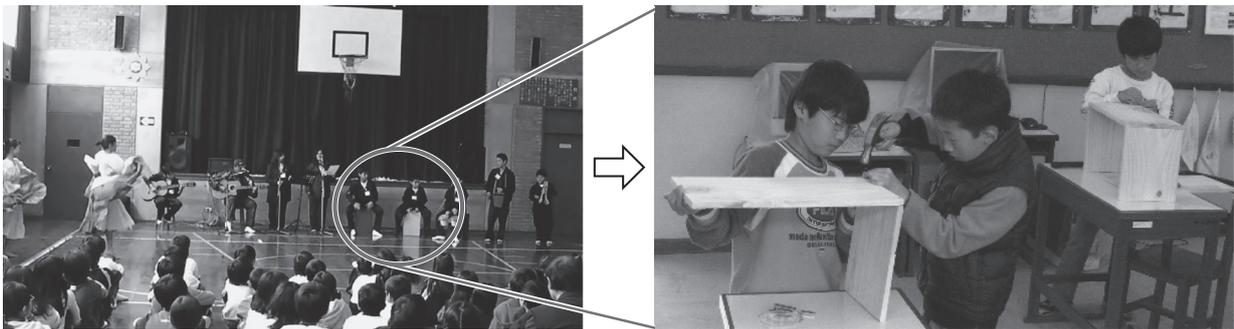
しかし、副読本を通じた学習だけでは広がりが出てこないため、子どもたちがどんなことについてより詳しく調べたいのかを発表させたところ、下のような意見が出てきた。

- |  |                                     |
|--|-------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> ペルーの楽器について    | <input type="checkbox"/> ペルーの動物について |
| <input type="checkbox"/> マチュ・ピチュ遺跡について | <input type="checkbox"/> クスコについて    |
| <input type="checkbox"/> チャンチャン遺跡について  | <input type="checkbox"/> トルヒーヨについて  |
| <input type="checkbox"/> アマゾンについて      | <input type="checkbox"/> セントロについて   |

ほぼ月ひとつのテーマで総合的な学習の内容を進め、できる限り子どもたちの挙げたテーマに触れ学習を進めるようにした。時間的に余裕が無いのではないか…という質問を各学年の

テーマ設定の際に受けたが、一年目はこのスパンで妥当だと考えた。文化祭の発表準備など大きな行事がある際には、2～3ヶ月間に関連的な指導を合わせて行うようにすれば、練習を十分行った上でリハーサルに臨める。

学習した内容は、月一回のペースで出していた学年通信「リマからこんにちは」にまとめ、保護者だけでなく日本の原籍校や知り合いの先生方にもデータとして送信し、リマ日本人学校の現在の様子を広く知らせるようにして、国際理解教育の一助とした。学校行事との関連も図り、一連の流れの中で学習が進められるように子どもたちが挙げたテーマの順番を組み替えながら関連付けて進めるようにした。例えば、本校と国際理解教育の上で交流が深い日系校ラ・ユニオン校との交流学習の中で、お礼として披露してくれたダンスで、不思議な楽器が子どもたちの目に留まった（○枠の中）。「カホン」と呼ばれる座ってたたくりズム楽器であるが、音楽室にあった実物を観察し、実際に作ってみることにした。学校行事の中で「観る場」から、総合的な学習の時間の中で「作る場・演奏する場」へと発展させてみた。



日系校のラ・ユニオン校との国際交流学習のダンスで見付けた楽器カホン（写真左・○印）から、音楽室にあった実物の観察を通して、実際に学級での総合的な学習の時間の中で作製してみた様子（写真右）。写真左の向かって右側二つの、二つのリズムが同時に打てる「カヒータ」やロバの下顎の骨から作られた「キハダ・デ・ブロ」にも関心が集まった。日本ではなかなか見ることのない楽器が多く、子どもたちも職員も興味深く鑑賞した。

こうした学習を重ねる中で、懸案だった一年目の文化祭では、ペルーを代表する観光地マチュ・ピチュ遺跡が、なぜ伝説の空中都市となったのか…を最新の研究成果も踏まえた劇にして舞台発表した。

マチュ・ピチュ遺跡へ実際に旅行してみた体験談やインター・ネット、筆者が旅行する中で取材した写真群から調べたり、ペルー国立博物館（Museo de la Nacion）へインカ帝国の人々が作った道具などを見学しに行ったりして、劇づくりや役づくりをした。地下から焼けた後が見付かったことなど最新の研究成果も取り入れ、マチュ・ピチュがスペイン軍に発見されなかったのは、インカ人の手でマチュ・ピチュが焼かれて放棄されたためではないか…という仮説を立てて劇に仕上げた。一度はインカ人自らの手で放棄された神聖な街が、現在はペルーを代表する遺跡であると同時に世界遺産として国際的にも保護されているのは、「インカ皇帝の魂はコンドルとなってまた蘇る」ことを信じていたインカ人たちの願いが実現されたものなのかもしれない。また、製作した打楽器「カホン」は劇中でも実際に使用し、文化祭の展示にも出品して高い関心を集めた。

こうして、一年目が終わる頃にはペルーの歴史や文化に筆者自身も詳しくなり、子どもたちと共にペルーの三大地形の内のコスタ（海岸砂漠地帯）とシエラ（山岳地帯）の主な内容を学習して「リマからこんにちは」にまとめることができた。子どもたちと共に調べたことをデータとして蓄積することで、何かの折にこれまで学習してきた内容が活用できるかもしれない。また、読み仮名をふれば、学級の子どもたちだけでなく小さな子どもたちにも読み物としても読んでもらえるかもしれない。できることを通してペルーの歴史や文化を広めていく上で有効な方法であると考え、二年目につなげていくことにした。

## (2) 二年目の取り組み（セルバ＜熱帯雨林地帯＞と、セルバから発展させた内容についての研究）

二年目は、ペルーの歴史や文化についての研究を継続していく上で、大変貴重な機会をいただいた。

小学部6年の担任となり、ペルーの三大地形うち最後のひとつとなったセルバ（熱帯雨林地帯）の取材・研究を修学旅行を通して進められることになったのである。日本から遠く離れ、しかも同じペルー国内とはいいながらも修学旅行本番での安全を期すため、修学旅行担当は事前に行われる下見にも行けるので、セルバのことについて知識・理解を深めるのに貴重な機会となった。

本校では二年に一度、中学部2・3学年または小学部5・6学年に修学旅行が回ってくる。小学部の修学旅行に伴い、子どもたちは全校の前で、こんなことを学習してきます…という内容をまとめて修学旅行壮行会で発表し、旅行が終わると、こんなことを学習してきました…という内容を発表する修学旅行報告会をそれぞれ行う。総合的な学習の内容も修学旅行に合わせて、セルバに関する学習を進めた。

子どもたちのほとんどがセルバへの旅行をしたことがないため、セルバを代表するアマゾン川流域の自然を臨場感をもって学習してもらえるように、修学旅行の下見で取材した内容をもとにDVDを作製して様子を映像で見て学習したり、学年通信「リマからこんにちは」で番外編を出して、アマゾン川流域の様子や貴重な植物物のいくつかを写真も交えて紹介したりして、修学旅行への準備とした。

修学旅行を何とか無事に終え、報告会を行った後は、いよいよ文化祭での発表テーマも考えていかなければならなくなった。総合的な学習の流れから考えると、セルバとの関連を図りながらも修学旅行からはテーマを離れた方が良いだろうと考えた。一緒に行った第5学年もアマゾンについての発表を考えており、文化祭で同じようなテーマが重複するのは好ましい状況ではないためでもあった。

そこで第6学年では、文化祭のテーマを修学旅行から外し、セルバでは唯一大きな地方文化となったチャチャポヤスや、アンデス文明の中でとても古くから神聖なシンボルとして用いられてきたチャカナ（アンデス十字）など、セルバに関連するテーマに設定することにした。夜のアマゾン川から見損ねたあの南十字星である。

南十字星は南半球で見える星座の代表格であるが、にわか雨で夜のアマゾン川から確認することができなかった。関連するシンボルにチャカナが出てきたが、少なくとも3000年以上も昔のチャビン文化から神聖なシンボルとして土器や絵、刺繍などのデザインとして用いられてきた。ペルーへのキリスト教の影響は16世紀中頃のスペイン人の流入から観られるものなので、明らかにキリスト教の十字架とは無縁のものである。ならば、なぜ十字模様がアンデス文明の中に観られるのか…という問題が出てきた。

一部の言い伝えではあるが、チャカナは南十字星を指すのだ…という。チャカナについて斬新的な学説を著書「Genesis de la Cultura Andina（2006年, Amaru Wayra刊）」の中で唱えている Carlos Milla Villena氏によると、天の星々の運行（回転）の中心＝天の南極に最も近いのが南十字星であり、天体の動きを観測する上で天の中心、つまり世界の中心を見定める上で南十字星は重要であった…という。私たちは「チャカナ＝南十字星」という考えに大きな関心を持ち、文献やインター・ネットの記事を調べたり、「インカの宇宙観（世界観）」を大変良く表していると伝えられるインカ人記録者パチャクティ・ヤムキの図について学習したりして、チャカナは南十字星を表したシンボルである…という確信を持つようになった。

だが、学習会や校外学習での機会を通して、ペルー考古学の専門家である天野博物館の阪根博先生や天文学者のイシツカ・ホセさんに伺ったお話では、明確な関連はわからない…ということであった。理由のひとつは、アンデス文明では星々をつなげて星座を作る風習はなく、天の暗い部分をつなげていろいろな形に見立てていたことがわかっていることであった。かなりの確信を持って学習を進めてきたので、はっきりさせることができず大変残念であった。しかし、最新の研究に触れることができ、学習したパチャクティ・ヤムキの図を舞台発表の背景として使ってみよう…という意見も出てきた。

チャチャポヤス文化については、正確にいうとセルバとシエラの境に当たる熱帯山岳地帯となるが、セルバで唯

一花開いた文化ということで学習を進めた。ここから、インカ帝国による「ミイラ政策」とも呼べるミイラを使った統治の様子を学習することができた。

チャチャポヤスは15世紀中頃まで、断崖絶壁に土製の人を模した墓（サルコファグス）を建てる共通性を持った地方文化であった。15世紀後半になると、インカ帝国が支配域を広めてくるようになった。首都クスコ周辺では採れない薬草類がチャチャポヤスには豊富にあったためだが、このことがチャチャポヤスにインカ帝国による侵略の手が伸びる原因となった。インカ帝国と戦ったチャチャポヤスは敗れ、精神的にも徹底的に支配するためにインカ帝国のミイラが使われた。それまで絶壁からチャチャポヤスの村々を見守っていた先祖たちの骨は墓の片隅に追いやられ、代わってインカ帝国のミイラ群が「監視」することになった。ミイラはインカ帝国の支配が永遠に続くことを表すシンボルであり、抵抗を続ける諸民族を精神的にも支配するために欠かせない戦略的手段となっていたことなどがわかってきた。

### (3) 三年目の取り組み（これまでの研究・資料群を活用した発展的な研究）

ペルー在留最後の年となった三年目は、これまで研究・収集してきた資料群を活用しながら、子どもたちの調べたい事柄に合わせた実践を行った。小学部3年ながら、ツアー・ガイドを職業とし、ペルーや日本の歴史に関心が高い保護者の影響を受けた子どもたちの第一声は、「ペルーの歴史について調べたいです！」だった。

まず、動物について調べたい…という意見を生かして、象形土器（事物を形でそのまま表現した土器）や彩文土器（土器に絵で表現したもの）でわかりやすいモチエ文化（BC200～AD700）の動物を採り上げて学習を進めた。

なぜこんなにたくさんの動物が出てくるのか…という疑問の中で、ドイツ人考古学者ユルゲン・ゴルテが復元した「モチエ神話」にたどり着いた。「昼（太陽）の神」と「夜（暗闇）の神」の二柱の神が互いにたくさんの動物たちを使いとして従え、ライバル関係にあるこの二柱の神々の仲を「恵み（豊饒）の神」がまるでウルトラマンのように出て来て仲立ちする…という概要である。この神話を大まかに理解すると、土器の象形や図柄から、どの場面を表しているのかが面白いようにわかるようになった。「モチエの文化は土器が語る」という言葉が伝えられている所以だ…と感じた。

文化祭の発表では、その後に進めた「ミイラについて調べよう」で舞台発表をした。

ミイラ文化については、二年目のセルバの文化で調べた内容を活用しながら、世界一古いミイラやインカ帝国のミイラを使った政策などを劇にして発表した。子どもたちは当初、怖いもの見たさで学習し始めたミイラだったが、ミイラは砂漠のような気候の中でごく自然に現れた「人の魂が永遠に残る証」とされたことや、インカ帝国の歴代の皇帝たちのミイラが「まるで生きているような姿で」残されていたことでインカ帝国の威厳を示せたこと、現在、世界一古いミイラはペルーとチリの国境付近に広がるアタカマ砂漠に栄えたチンチョーロス文化のものであること、ミイラは当時のインカ人たちにとって精神的な支えであり、ミイラを使って他の部族を監視していたこと…などを学習した。

発表を通して子どもたちに、ミイラは人々の魂（意志）を受け継ぐものであり、決してお化けなどの怖いものではない…ということを理解してもらえたようだ。

## 3. 実践を振り返って

子どもたちと共にペルーという国の歴史や文化を学ぶ中で、この国の偉大さを感じることができたことが一番大きな成果だった。子どもたちの多くがやがては日本へ帰国したり、他の国へ転出したりするだろうが、ペルーを代表するインカ帝国をはじめとする様々な文化の中に、日本と似ているところや違うところを見付け出すことによって歴史や文化を比べ、ペルーという国の素晴らしさをこれからも学び続けてくれるだろう。これまで調べてきた内容をまとめたものや博物館群の写真の一部については、DVDやCD-RWにコピーして研究同人となってくれた子どもたちに渡している。いつの日か、この子どもたちがペルーのことを語る時、共に学んだこの国の偉大さについて資料を活用しながら説明してくれるとすれば、指導者としてこれに勝る喜びは無い。

また、私自身もペルーの歴史や文化の研究をライフ・ワークとしてこれからも研究を続け、何らかの形でその成果を発信し続けていくことこそが、私なりの国際化…だと考えている。